

白山ふるさと文学賞

第五回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生中学年の部 優秀賞

# お母さんへの思い

蕪城小学校四年

北村 きたむら

統真 とうま

ぼくは、一年生の夏休みに「急せいリンパせい白血病」という病気になりました。ぼくは、大へんな病気になるってしまっ、いろんなけんさや、ちりょうをしました。一年間も入院してとても大へんだったけれど、それによつとつきそつたり、お世話をしてくれたりしたお母さんもとて大へんだったと思います。

お母さんには三つの仕事があります。一つ目は、パソコンでえい語を日本語に直したり、日本語をえい語に直したりする「ほんやく」という仕事です。二つ目は「こじんじょうほうほご」の仕組みを会社や病院に教えにいく仕事です。もう一つは、ヨガの先生をしています。ふつうの人たちだけでなく、しょうがいのある子どもたちやお母さんたちのために教えています。

ぼくが病気になるたとき、お母さんはとてもまよつたけれど、仕事をつづけながらぼくのつきそいをするに決めました。なので、ぼくといっしょに病院にねとまりしながら、昼間はとてせまいところでパソコンを打ち、しめきりの前はよるもずつと仕事をしていました。水曜の夜は、お父さんに交代してもらつて、ヨガの教室に行つて、家に帰つてそうじなどをしてから、木曜の朝にまた病院にもどつてきていました。

特に、一回目のちりょうのときが一番大へんだつたと思います。強いくすりを早く体から出すために生食えん水を一時間に二百ミリリットルもずつと流しっぱなしにするので、おしっこが何回も出ます。それを毎回計つて記録するのもお母さんの仕事でした。一番多いときは、夜中に十五回いじょうトイレに起きることが二週間いじょうつづいたので、お母さんはぜんぜんねむれていなかったと思います。

そして、病室はとてせまくて、マットをしく場所がなくて、ヨガの練習をすることができなかつたので、一年間でとてもきん肉が少なくなつてしまつて、

「教えるのが大へん。」

と言いながらもがんばつてつづけていました。

入院中、ぼくは、ちりょうの薬できげんが悪くなつたり、食べ物の好ききらいが多くなつたりして、お母さんにすぐわがまを言つたりしたけど、お母さんは

「薬のせい。とうまのせいかくが悪くなつたんじゃない。いつもちりょうがんばつていて、えらいね。」

と、ぼくがめちやくちやなことを言つたりやつたりしても、おこらずにあげましてくれました。

家族みんなでちりょうをがんばつたおかげで、ぼくは無事にたい院して、だんだん元の生活ができるよになつてきました。まだ月に一回、けんさやちりょうのために通院しているので、お母さんは毎回つきそいをしてくれるけれど、中学生くらいになつたら自分一人で通つて、お母さんにはゆつくり休んでもらいたいです。

そしていつか、もう通院しなくてよくなるまで、しつかりと病気をなおしたいと思います。

たい院からやく二年たつて、ぼくの体力はずいぶん回ふくしました。たい院してすぐは、ちよつと歩いただけでつかれてむねが苦しくなりました。もし転んでけがをしたら体にばいきんが入つてかんせんよになつてしまふかもしれないので、お母さんは毎日学校まで送りむかえをしてくれたり、学校の先生と連らくを取り合つて、安心して学校に通えるよに助けてくれたりしました。今はもう、集団登校で歩いて通えるよになりました。まだ体育のじゅ業はみんなについていく自信がないのでしえん学級の先生といっしょにやつているけれど、今年の運動会はダンスだけでなく、走るきよう走にも出たいと思つています。

ぼくの体力だけでなく、二年たつてお母さんのきん肉もだんだん元にもどつてきました。今は、ぼくをかた車して、スクワットできるくらいに回ふくしています。

そしてお母さんはげんざい

「入院していたときに地いきの人たちにたくさんお世話になつたから。」

と言って、町の子ども会の役員の代表をしています。夏休みは、毎日ラジオ体そうに参加して、子どもたちが安全で元気に体そうできるように見守りをしてれています。

子ども会は行事が多くて、ほとんどの土日はそのお世話をしなければならぬので、家にいないことが多いけれど、ぼくは入院中にたくさんそばにいてももらえたので、がまんしなければならぬな、と思っています。

最後に、ぼくには、お母さんといっしょにたっせいしたいことがあります。それは白山登山です。一年生の夏休みに予定していたのですが、病気になるってしまったので行くことができなかつたのです。でも、来年の夏は、今度こそ実げんして、白山のちよう上でお母さんといっしょにバンザイをしたいと思っています。

